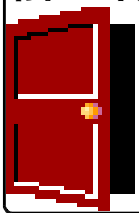


令和5年度《昨年度に続き、今年度も読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



読書活動への扉を開く！

N o 80

桑村小学校令和6年1月22日 文責 渡邊

「一人一人を大切にする学び舎」を目指して!!

今回は、『麹町中学校の型破り校長 非常識な教え』（工藤勇一著 SBクリエイティブ 2019年9月）の第三章「『協調性・みんな仲良く』を疑う 多様性の本質とは？」から、『みんな仲良く』を否定した全校集会」にスポットを当ててみたいと思います。

「スティーブ・ジョブズは嫌われ者だったって知ってるかな。相当嫌われていたらしいよ。じゃあ、彼はどんなことに優れていたかわかるかな？それは『目的』なんだ。彼はアップルの製品を通じて世界中の人を楽しませたいという目的を持っていた。だからコンピュータをつくる時もiPhoneをつくる時も、一切の妥協をせず、細部にこだわって自分の理想とするアイデアを押し通した。

社員からはいろんな意見が出たそうだよ。でも、彼はそれをことごとくはねつけた。頭にきて会社を辞める人もたくさんいたみたい。でも彼は自分の意見を曲げずに目的を達成できたんだ。

もちろんそれは誰でも真似できることではないよ。スティーブ・ジョブズは創業者だから部下に命令する権限があったし、彼の思い描いていたアイデアが素晴らしいものだったからいい製品ができた。アイデアに自信がないなら人の意見を聞けばいいと思うんだ。

ただ、ここでちょっと考えて欲しいんだけど、『みんなの意見を聞いて目的を達成できないこと』と『意見を聞かずに目的を達成すること』。どっちが大事かな？

どっちを優先したらいいかの判断はみんなの今後の人生で何度も起きることなんだ。そのときに覚えてほしいのは、みんなと仲良くすることや協調することは決して目的ではないということなんだよな」（中略）

協調性とはあくまでも目標を達成するための一つの手段であって、「目的」ではありません。みんなが同じ方向を向いて協働したほうがいい場面では協働すればいいというだけの話です。たしかに穏便に物事が進めば理想的ですが、波風を立てないことを優先で物事が進まないのであれば、協調性を重んじることに価値はないのではないのでしょうか。

日本社会では周囲と仲良くできない子や、調和を乱す子、コミュニケーションがうまく取れない子をことさら異端扱いしようとする傾向があります。いわゆる「出る杭を打つ社会」です。

しかし、各自がより主体性を発揮していくこれからの社会は、その真逆をいきます。

つまり、出る杭だらけの社会、もしくは出る杭が尊重される社会です。大人世代も含め、出る杭だらけの社会の感覚に慣れた人は多くありません。だからこそ当校では出る杭だらけの社会における身の振り方を教えるようにしています。

具体的には、こうです。

- ・人はみな違うと理解してもらう
- ・感情をコントロールする重要性を教える
- ・対立があったときの合意形成のはかり方を学ぶ

そして、これこそ子どもたちが社会に出たときに必ず役に立つ、ダイバーシティ教育の根幹だと考えています。（P119. 120. 121より引用）

「協調性・みんな仲良く」を疑うことは、これまでの学校教育を経験してきている者においては、なかなか容易なことではないのかもしれませんが、しかし、これからの国際社会を生きていく子供たちには、そうした考え方は必要なことなのでしょう。何を最上位の目標とするのかが問われるのですから。

次に、これと関連して、同じく第三章に記されている「違いを認める姿勢は、しずかちゃんに学ぶ」を紹介します。

子どもの自律で大事なことは、協調性を教えるのではなく、多様性をどれだけ受け入れられるかです。つまり、人はみんな違う、簡単に動いてくれるものでもない。それを当たり前の前提として動けるようになることです。

ここで言う「違いを認める」とは、相手の考えや置かれた立場を尊重し、理解に努めるということです。

異なる意見や立場をいったんOKと受け止めた上で、相手との対立を無駄に激化させないように言葉を選び、働きかけていく。これが多様化社会における理想的なコミュニケーションの仕方であり、合意形成を図るとき、対人関係を構築するときに使える強力な武器になります。

多様化社会における理想的なコミュニケーションスキルのわかりやすい例は、『ドラえもん』のしずかちゃんです。(中略)

たえば「さくらちゃん、友達から「一緒に遊ばない？」と誘われると、真っ先に「いいわね、素敵」と肯定的な言葉で返します。そのあとに「でも今日、ピアノの習い事があるんだ」と自分の立場を表明する。誘った友達からすれば、思い通りにならなかったけれども不快感は残りません。

こうした会話の技術はアセーション(肯定)と呼ばれます。(P125, 126, 127より引用)

「ドラえもん」は、私が小学生だった頃、テレビで放映されていたことを記憶しています。ネコ型ロボットのドラえもん勉強もスポーツも苦手な小学生、野比のび太が繰り広げる日常生活を描いたアニメです。そこにのび太の同級生であるジャイアンとスネ夫、そしてしずちゃんが加わるのです。

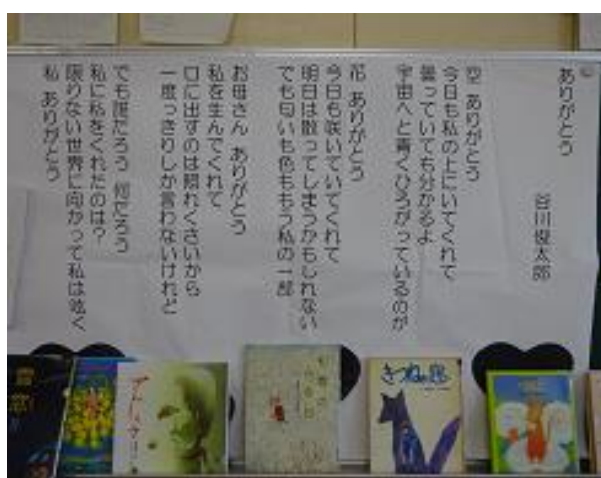
違いを認めるのにあたり、しずかちゃんが例に出されたことは意外でした。しかし、「ドラえもん」の中でのしずかちゃんは、確かに「いいわね、素敵」と相手のことを初めに認めます。これって、他者と良好な関係性を構築するには大切な所作ですね。工藤氏の着眼点に脱帽です。

ここで、多様性をいかに受け入れるかについて考えたとき、「感性」の育成が鍵となるように思います。相手の置かれた立場を尊重し、理解に努めることは小学生の発達段階では、なかなか困難なことにあるように思います。ただ何となく学校生活を送っていたのでは、「感性」は身に付きません。そこで、大切にしたいのが読書です。物語のお話に出てくる登場人物の気持ちに寄り添ったり、詩から感じる自らの思いを振り返ったりするので

学校では、これまで体験活動と読書活動をつないで、「感性」の育成に努めてきました。これからもこうした取組を大切に、持続可能な活動へと発展させ、一人一人を大切にしたい学び舎を創造していきたいと考えます。



【教室の詩の掲示①】



【教室の詩の掲示②】

本校の教室には素敵な詩が紹介されていて、心がとても温かくなります。

「幸せな学校づくり」は、こうした地道な取組の積み重ねから形成されていくのだと思います。これらの詩から、子供たちの感性が育成されますように！